

福澤朗



人が喜ぶ仕事をしたい。それが僕の喜びだから。

A K I R A

F U K U Z A W A

フリーアナウンサー

心に深く刻まれている 3人の恩師

僕は幸いなことに、多くの良き師と出会ってきましたが、特に印象に残っているのは3人の先生ですね。1人目は、小1、2年時の担任だった荒木先生。40代の男性教師で、いたずらをするプロレス技のアイアン・クロウをしてくるんです。もちろん手加減されたアイアン・クロウですよ(笑)。後に、僕がプロレス中継をするようになることを思うと、ご縁を感じずにはられません。2人目は、小4から小6まで通った塾の島先生。厳しいながらも愛情をもって接してくださる女性の先生でした。「漢字は練習さえすれば必ず得点につながる」と指導してくださり、鉛筆を持つ手の、紙に触れる部分が真っ黒になるまで練習したことを懐かしく思い出します。島先生からは、備えが自信と結果につながることを学ばせていただきました。3人目は、「演劇集団 円」の研究所でご指導いただいた、僕と同姓の福澤富夫先生。僕は、舞台俳優になりたいくて、大学2年の冬から3年間、研究所に通ったのですが、結局、正劇団員にはなれませんでした。でも、福澤先生は、アナウンサーの道に進んだ僕をずっと応援してくださっていたんです。昨年、TBSで放送されたドラマ『下町ロケット』で悪役を演じた際に頂いたお手紙には、先生の喜びが文面いっぱいに綴られていて、胸に込み上げるものがありました。

試練のおかげで生まれた 「ジャストミート!!」

日本テレビに入社して2年目に、プロレス中継の担当を命ぜられたのですが、これは僕にとって大きな試練でした。なぜなら、僕はプロレスが嫌いだったからです。途



方に暮れた僕は、気持ちを整理しようと、プロレスが嫌いな理由を紙に書き出してみました。「汗や血が飛び散る」、「プロレス史を知らないと楽しめない」など、マイナスイメージが山ほど出てきて、さらに落ち込みました。でも、その理由を見つめているうちに「こうしたマイナスイメージを覆す中継をすればいいんだ!」と思えるようになったんです。それで、目の前で展開されることを、より恰好よく、よりストレートな言葉で表現し、ドライブ感のある中継を心がけるようになりました。

そんな折、ある中継で、当時の外国人最強レスラーだったスタン・ハンセン選手が、日本人選手にウエスタン・ラリアットという必殺技をかけました。それが見事に決まった瞬間、両選手の汗が霧のように飛んで、そこに照明があたり、うっすらと虹がかかったんです。そのとき「この衝撃的な強さと、感動的な美しさを絶叫フレーズにしたい」という思いが湧き、家に帰るやいなや、思いつく言葉を次々と書き出しました。その中で、最もしっくりきた言葉が「ジャストミート!!」だったのです。

相手が聞く耳を持つか否かは 話し手次第

僕は、「伝わる」話し方をテーマにした講演活動もさせていただいていますが、その中でよく聞くのが「最近の若い子は聞く耳を持たない」という悩み。この悩みの原因は、多くの場合、話し手にある僕は思っています。「伝わる」話し方には、細かいテクニックがたくさんあり、訓練が必要なものも多いのですが、すぐにできることが1つあります。それは、話の冒頭で聞き手の興味や関心をしっかりと引くということです。聞き手が聞く耳を持つか否かは、最初の数分で決まりますから、冒頭で、聞き手の期待値を高める努力をしてください。つまり、面白いネタは出し惜しみせずに、冒頭からどんどん披露するのが正解です。また、「人前で話すときに緊張する」という悩みも、よく耳にしますが、「緊張」と「不安」は似て非なるもの。心拍数が上がって、血液の循環が良くなり、頭が冴える「緊張」は歓迎してください。ただし、人は緊張すると早口になるので、緊張していると思ったら、意識してゆっくり話すことを心がけましょう。一方、「不安」の要因は、そのほとんどが準備不足によるもの。したがって、話すときに不安を感じる人は、しっかりと準備をするだけの話です!

「トライ」を積み重ねると 人生は豊かになる

目標を定めることは大切なことだし、それに向かって努力をすることは素晴らしいことだと思います。でも、目標を定め、それに固執してしまうと、人生における選択肢や自分の可能性を狭めてしまいかねないのも事実。例えば、もし僕が、アナウンサーになった当初の目標だった情報番組の担当に固執して、プロレス中継の担当を拒んでいたら、僕の代名詞でもある「ジャストミート!!」という言葉は存在していません。だから、「目標は掲げながらも、目の前のことにどんどんトライしよう!」というのが、僕の考え方。小さなトライを積み重ねていくと、思いもよらないところで道が開けたり、自分でも知らなかった自分の可能性に出会えたりして、人生が豊かになると思うんです。ただ、困難に直面したときや、考えがまとまらないときは、紙に書き出すことをおすすめします。気持ちが整理されて、前進できますよ。

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会を来年に控え、いろんな場面で「2020年に向けて」という表現を耳にしますが、僕にとって2020年はゴールではなくスタート。来年以降もますます大きく進化および深化をしていくであろう日本の様子を、メディアに関わる人間として、俯瞰で見つめていきたい考えです。また、こよなく卓球を愛する一個人としては、卓球日本代表を全力で応援してまいります!



鉄道好きの福澤朗さんが出演する『土曜スペシャル 鉄道沿線ひたすら歩き旅シリーズ』(テレビ東京)のロケにて。「永遠に続くように見えて、突然行き止まりになっていたりするレールは、あたかも人生のよう。だからこそ『今、この瞬間を大事に生きていこう!』と思うんです」と福澤さん。

福澤 朗(ふくざわ・あきら)

1963年、東京都生まれ。1988年、早稲田大学第一文学部を卒業。同年、アナウンサーとして日本テレビに入社。在局中はアナウンサーとして数多くのヒット番組に出演し、一躍人気アナウンサーとなる。「ジャストミート!!」、「ファイヤー!!」といった流行語の生みの親でもある。2003年に旗揚げした「福澤一座」では、脚本・演出・座長を務める。2005年7月、同局チーフアナウンサーを経てフリーアナウンサーに。趣味は、鉄道、和菓子屋巡り、日本酒を飲むこと。特技は卓球で練習は欠かさない。著書に『“また会いたい”と言わせる話し方、伝え方』(講談社)、『日英対訳 ときめきの日本酒』(文芸社)などがある。

わたしの
イチオシ!



🎀 クイズ(P35) 正解者の中から
抽選で1名様に、福澤朗さんオススメの
「欧風洋菓子店 SHIMIZU 浅草 ブランデーケーキ」
をプレゼントします。ふるってご応募ください!

わたしの心にある風景



【新宿の超高層ビルディング群】

新宿生まれ新宿育ちの僕には、「これが僕のふるさとです」と示せる山や川の景色がありません。近いものがあるとしたら、それは、新宿の超高層ビルが立ち並ぶ風景なんだと思います。新宿区立の小学校に通っていた6年間は、超高層ビルが次々と建設されていく様子を校庭から見ていたし、中学校も高校も大学も新宿区にあったし、苦しい時の神頼みは新宿のど真ん中にある花園神社でしたから、新宿の超高層ビルに囲まれると妙にホッとするんです。同時に、夢に向かって頑張っていた昔の自分を思い出して懐かしい気持ちにもなりますね。